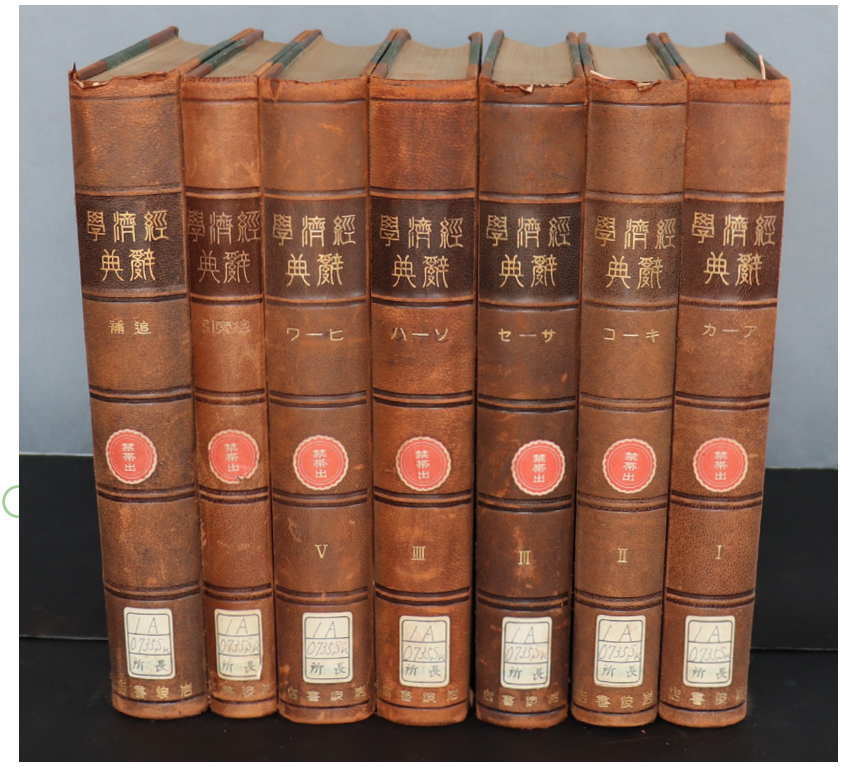
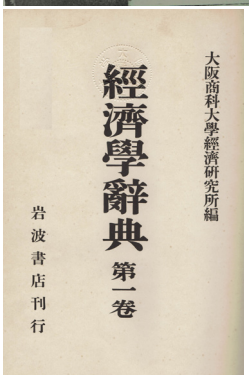
140周年展+大学史資料館(大学博物館)設立準備：NEWS LETTER(No.8)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: (仮称)大学史資料館設立準備委員会 公開日: 2020-08-20 キーワード (Ja): 大阪商科大學經濟研究所編『經濟學辭典』： 日本初の本格的な経済学辞典, 野村徳七, 関一, 河田嗣郎, 大阪平野の地下を探る： ボーリングコアが解明した地下地質, ODボーリング, 上町断層 キーワード (En): 作成者: 著者不明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20200825-001

140 周年展＋大学史資料館（大学博物館）設立準備
NEWS LETTER No.8
2020年7月31日





写真左
『経済学辞典』Ⅰ～Ⅴ巻、総索引、追補からなる。革張りの表紙に金文字でタイトルが書かれ、本の上部も金色に塗られており、重厚感がある。

写真上
大阪商科大学正門（烏ヶ辻時代、1928年）。大学名と並んで「大阪市経済研究所」の銘板がある。

写真下
第Ⅰ巻の扉。

大阪商科大學經濟研究所編『經濟學辭典』―日本初の本格的な経済学辞典―

大学の知を発掘！ 013

1927年10月、野村證券や大和銀行（現、りそな銀行）の設立者である野村徳七（のむらとくしち）（1878～1945）（大阪の実業家、市立大阪商業学校1893年卒）が、経済事情を実証分析しその解説を社会に提供する機関を設立する目的で、当時日本最大の都市・大阪市に100万円の寄付を申し出た。関一（せきはじめ）（1873～1935）大阪市長や河田嗣郎（かわたしろう）（1883～1942）大阪商科大学初代学長は、学理と実際調査研究の架橋ならびに経済関連資料の収集と経済実態の調査分析を目的とする大阪商科大学経済研究所（大阪市経済研究所）を設立した。河田学長が経済研究所初代所長を兼務した。

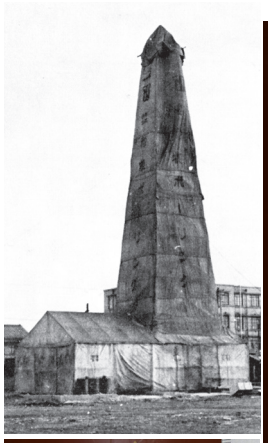
彦根高等商業学校の四宮恭二（しのみやきょうじ）（1896～1989）、菅野和太郎（かんのわたろう）（1895～1976）の両教授（経済研究所研究員嘱託、のち大阪商科大学高等商業部教授）が、経済学辞典の編集を経済研究所の事業とするよう河田学長に進言し、受けいれられた。1928年8月1日に経済研究所創設事務は始まったが、同年末には経済学辞典編集の準備作業が開始され、『経済学辞典』（全5巻と総索引）は1930年11月～1932年5月、岩波書店から刊行された。1936年10月には記載内容や項目を補充した追補版が刊行された。全5巻の採録項目数3434、本文2767ページ、追補版は項目数951、本文594ページと、本辞典は日本で初めての本格的な経済学辞典であった。それは単なる用語の説明ではなく、また、外国語文献を翻訳する形態でもなく、日本経済の実状を考慮して事項を概説する「読む辞典」であった。第Ⅰ巻の序によると、当時、経済的知恵を備えることが要望されていたが、「手引となり参考となるべき完備せる経済辞典」がなく「不便至大なり」に応えた企画で、1937年に6刷となるほど好評を博した。

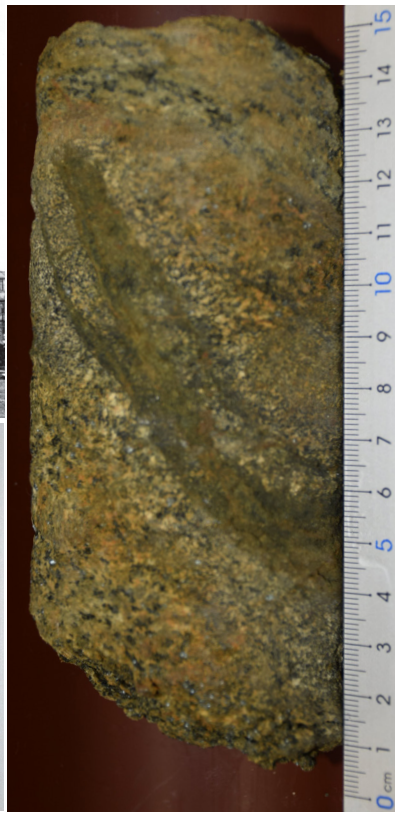
経済研究所設立2年後での刊行開始は、戦後版『経済学辞典』の第3版（岩波書店1992年）の共同編集に3年間を要した私には驚くほど短期間である。当時の経済研究所では、戦後に商学部や経済学部に所属となった教員や他大学の教員等との共同作業が盛んで、編纂委員21人、執筆者204人が気概と情熱をもって辞典刊行事業に取り組んだ結果であり、新設された経済研究所の声価を高めたことはまちがいない。1928年3月、東京商科大学（現、一橋大学）に次いで、大阪商科大学が設立（前身校である大阪市立高等商業学校の一部が大学に昇格）された。本辞典の完成は、その設立を記念する事業としても祝福された。

（経済研究所・創造都市研究科 名誉教授　明石芳彦）

140周年展と大学史資料館（大学博物館）
実現にむけてご寄附のお願い →大阪市立大学夢基金
お申込み時にTOP1「創立140周年記念事業」を選択してください
【お問い合わせ】大学サポーター交流室（夢基金担当）　TEL06-6605-3415
https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/about/fund/xbtf2s

編集発行
（仮称）大学史資料館設立準備委員会
学術情報総合センター6階　大学史資料室内
TEL：06-6605-3261





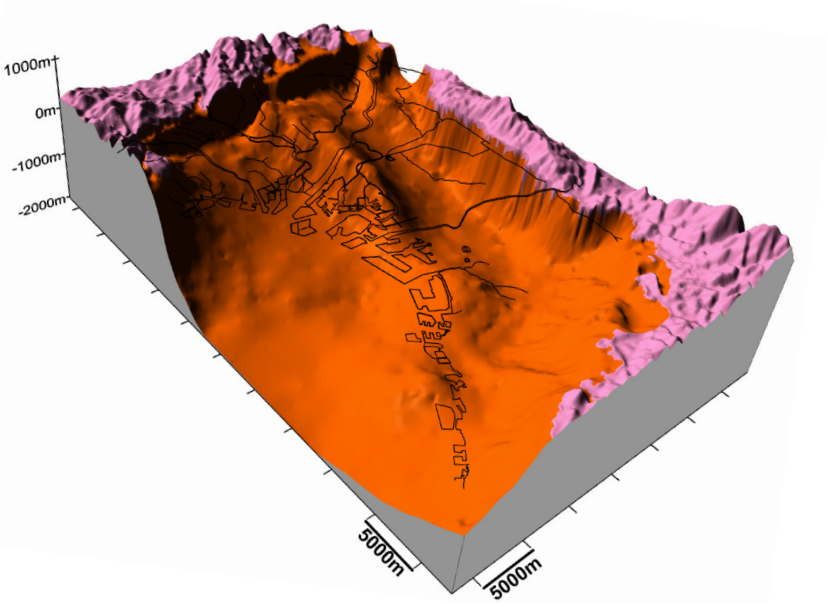


写真１（左上）：OD−1 ボーリング（大阪市港区）の掘削の様子。櫓を組んで掘削のためのドリルを打ち込む。『大阪地盤沈下対策誌』（大阪地盤沈下総合対策協議会 1972 年）
写真２・３：OD−2 ボーリング（大阪市都島区）で採取された地層試料。
写真２（左下）：［深度 656.2−656.0m］岩盤直上の礫混じり粗粒砂層。
写真３（中央）：［深度 657.5−657.0 m］風化した岩盤（閃緑岩）。
図１（右）：大阪平野の岩盤の起伏（起伏を 5 倍に強調）。オレンジ：第四紀層におおわれ地下に埋没した岩盤上面。ピンク：地表に露出した岩盤地域（主に山地）。

大阪平野の地下を探る―ボーリングコアが解明した地下地質―

大学の知を発掘！ 014

淀川最下流域のデルタ地帯に都市大阪は立地している。1960 年代まで多くの工場やビルでは、大阪平野の地下の第四紀層（260 万年前以降の地層）に含まれる地下水を利用していた。1962 年に大阪市内で汲み上げられた地下水は、1 日 30 万トンに達する。この揚水過剰で大阪平野は著しい地盤沈下（最大累積沈下約 2.8m、大阪市域の 1/3 が 1m 以上沈下）を引き起こし、台風時に大阪市の西部地域で大きな高潮浸水被害を受けることになる。そこで、大阪府・市は、平野地下の地盤特性や地質構造の把握のため、数百 m の深さまでの地層試料採取調査（OD ボーリング、OD：Osaka Deep の略）を 9 地点で行った（写真 1）。

OD−1（大阪市港区）と OD−2（大阪市都島区）ボーリングの結果は、現在でも大阪平野の地下の地質標準層序（地層の重なり方の標準）となっている。掘削長 900m の OD−1 の試料（ボーリングコア）は、すべて第四紀の堆積層（砂・礫・泥など）であった。人工的に発生させた振動による地震探査から、この地点の岩盤上面は深度約 1500m にあることも示された。上町台地の北側に位置する OD−2 ボーリングは唯一岩盤に到達し、その深度は 656.2m であった（写真 2･3）。このことから、上町台地が 800m 以上も相対的に隆起していること、その原因が台地西側を南北に延びる上町断層の活動によることが明確となった。地盤沈下に関わる厚い粘土層の土質特性も判明し、地下水の揚水規制をはじめとする対策が講じられ、地盤沈下は 1965 年以降に沈静化した。大阪市立大学理学部地球学科の倉庫には、この 2 地点のボーリングコアの一部が保管されている。

その後、1995 年兵庫県南部地震のあとに、活断層として地震発生の危惧がある上町断層の活動度を評価するボーリング調査や地震探査が行われ、大阪平野の地下の地質構造がさらに明らかにされてきた。図 1 から、上町断層と生駒断層により生じた岩盤の起伏が読み取れる。

このように、大阪平野の地下地質に関する資料は、自然災害の経緯と関連して蓄積されてきた。大阪平野は、大都市域でありながら世界的にも地下の地質資料が豊富な地域となっている。

（理学研究科　三田村宗樹）

準備室だより

◆140 周年展にむけて、文系（大学史･文系資料）･理系（理系資料･古人骨）･展示設計ワーキンググループで、実施設計を進めています。

◆大阪市立大学ホームページの創立 140 周年記念特設サイトに、【「大学史資料館」の設立をめざして】が公開されています。140 周年展および大学史資料館の準備状況の報告や、『NEWS LETTER』などを順次掲載していきます。ぜひご覧ください。

◆この『NEWS LETTER』は、大阪市立大学 学術情報総合センター ホームページの学術機関リポジトリでも公開しています。「大学史資料館」で検索してください。

（仮称）「大学史資料館」設立 準備委員会からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→学術情報総合センター 6 階 大学史資料室内　TEL：06-6605-3261